



山ノ神の森での神鎮めの神事

ぶちきらい 2019.1★ 蓋井島 山ノ神神事

6年に一度、辰年と戌年に行なわれる「山ノ神神事」が11月23日から25日まで、蓋井島で行なわれました。今回は、島民によって280年以上受け継がれている伝統行事「山ノ神神事」を紹介します。



親から子へ
代々受け継がれて
二百八十年以上

本州最西端の島、蓋井島

吉見港から定期船で約35分、響灘に浮かぶ人口約90人、漁業を中心とした離島、蓋井島。周辺海域は、海流の影響もあり海産物の宝庫で、アワビ、サザエ、ウニなどの海の幸が豊富にとれ、普段は釣り客でにぎわいます。

島にある金比羅山は「しま山100選」に選定されており、エミュー(ダチョウより一回り小さい飛べない鳥)を飼育する牧場があることでも有名です。

透き通った海、のんびりと過ごす猫、元気なおばあちゃんたちと、



▶下関市指定有形民俗文化財
蓋井島「山ノ神」神事記録

走り回る子どもたちに心を癒されます。

神聖なる山ノ神

蓋井島では自然の森を「やま」と呼び、ここに祖先の霊であり、穀物の豊かな実りをつかさどる神である「山ノ神」を祭っています。

山ノ神をもてなす神事の主な内容は、普段は四つの山に祭られている山ノ神を、6年ごとに山から各山の代表の家である当元家へと迎え、人と共に食事をし、もてなした後、再び各山に送り帰すというものです。それぞれ、「神迎え神事」、「賄い」、「神送り神事」といいます。

古い儀礼の形をそのまま伝えている山ノ神神事は大変貴重で、山ノ神が宿る四つの森は、「蓋井島山



▲山ノ神の森の「つくりもの」である竹コースターで遊ぶ子どもたち。



▲山ノ神の森へ向かう神送りの行列



▲当元家で行なわれた神送り神事

「山ノ神」の森という名称で国の重要有形民俗文化財に指定されています。神聖にして不可侵の存在として恐れられている山ノ神。島民は神事するとき以外は森に立ち入ることも、枯れ木を拾うことも固く禁じられています。

神事一日目「神迎え神事」

神事は島の全世帯を「山」と呼ばれる四つの組に分けて行い、各組を代表する「当元」の家で山ノ神を迎えます。「当元」は世襲され、島内の他の各家も先祖代々決まっているいずれかの山ノ神に奉仕します。各当元家では神事に使われる道具が用意され、神官が、一の山から四の山までの当元家を順に回り、祝詞を上げて神迎え神事が執り行なわれました。神官と島民が6年前の資料や写真を参考に準備し、時には、6年前の昔話で盛り上げていました。

神事二日目「賄い」

一の山と二の山の当元家では、山ノ神を迎え一同に会し食事をすする賄いが行なわれます。山ノ神を山海の幸でもてなし、来客と共に食事を楽しんでいました。また、この日までに各山ノ神の森に、山ノ神を喜ばせるための「つくりもの」といわれる人形や飾り物が手作りで作られ、山はまるで別世界のように変にぎやかに飾り付けられました。

神事二日目「神送り神事」

神事のクライマックスであるこの日は、定期船の臨時便が出るほど大勢の人が島を訪れました。各山の当元家で、神送り神事が行なわれ、山ノ神が当元家にとどまらないように、神官が小石をまき、太刀で空を切り、白をきねで三度つく儀礼を行います。神送りの行列が塩をまいて清めながら山ノ神の森まで続き、一の山から順に、鎮めの神事を行います。山ノ神を「神籬」という枯れ木を円すい状に立てたほこらに返し、75ひろ（二ひろは両手を広げた長さ）のしめ縄でぐるぐる巻きにして封じ込めました。その後は、「神籬」の前に供えられたもちを奪い合います。もちの奪い合いが激しいほど山ノ神が喜ぶとされ、以前は、他の山の人を



▲蓋井島自治会長 大空 正治さん

山から引きずり下ろすほど激しいものだったそうです。
受け継がれる伝統

蓋井島自治会長の大空正治さんに話を伺いました。「今回の神事は、島民の負担も大きいことから、一時は中止も検討されましたが、伝統を受け継ぐため、森の飾り付けや料理など一部を簡略化して実施しました」と大空さん。「長く受け継がれている神事なので、工夫しながら続けていきたいです」。

時代とともに変わるものもありますが、島民の山ノ神への信仰のように変わらないものもあります。280年以上続くこの「山ノ神神事」も少しずつ形を変えてはいますが、今日へと、しっかりと受け継がれています。過去から現在へ伝統を受け継ぎ、神事をやり遂げた島民の笑顔は、まぶしいくらい輝いていました。



文化財保護課
藤原 彰久
主任

蓋井島「山ノ神」神事は、古くは元文四(1739)年の『地下上申』に記載があり、また寛政八(1796)年以降の神事記録が現存する、少なくとも約280年前から蓋井島の島民によって大切に守り伝えられてきた山ノ神の祭りです。従来、山ノ神信仰は、農業と深く関連するものですが、漁業中心の生活となった今でも、神事の基本を守りつつ、時代や社会の変化に合わせてながら、神事が行われています。特に「つくりもの」は山ノ神だけ

でなく、来島者や見学者ももてなす内容に変容しつつあり、島民の人柄が伝わってきます。

神事期間中は離島者も一時帰島し、旧来の親交を温めます。6年に一度のサイクルは島民が過去の神事を振り返り、また次回の神事を思い、蓋井島の過去と未来に思いをはせる良い契機となっています。蓋井島「山ノ神」神事が、これからも長く大切に伝承されていくことを望んでいます。